

哲学と宗教は、死をどのように捉えたか？

死生学研究会資料 ■ ⑩2016/3/21

仏教	原始仏教 釈迦(ブッダ)	約2500年前 前463年 ～前383年	各人が修行によって悟りを目指す教え。人は必ず死ぬ。不滅なもの(靈魂のたぐい)は存在しない。超越者はなし。釈迦の死の乗り越え方の答え:常に物事の本質を捉え、自我に固執する見方を止め、世界を空(くう)と見よ。空とは、形(粹)はあるが本質がない。四法印(諸行無常・諸法無我…)、四聖諦(苦諦・集諦・滅諦…)、八正道。
	大乗仏教	前1世紀 ～後4世紀 (インドで)	自利(悟り)は、利他(救済)の実践で得られる。超越者(仏陀)あり。ナーガールジュナ(竜樹:後150～250頃):宇宙的仏陀を唯一認め、他のものは、縁起(因縁生起)によって消滅を繰り返すから、固定的・絶対的なものではなく、空である。般若経:この空の思想が説かれた経を全て般若経と呼び、その中に般若心経(262)がある。日本→大乗仏教。
ヒンドゥー教	バラモン教が が原点	前4世紀頃 国教になる	インドには元々バラモン教があって、反バラモンの運動で仏教が誕生した。バラモン教は土着神を取り込みヒンドゥー化。ヒンドゥー教は4世紀には国教に。仏教は7世紀に密教化し13世紀に滅ぶ。死後49日で必ず何かに生まれ変わる。
儒教	孔子 (儒教の祖)	前551年頃 ～前479年頃	弟子の死の問いに、「われ未だ生を知らず、いづくぞ死を知らんや」と答えた。孔子は「仁と礼の実践」によって理想の社会生活をいかに築くかに重点。儒教では葬送儀礼は特に重要視され、位牌は、魂魄合体の儀式の依代として誕生。
キリスト教	キリスト	前4年頃 ～後30年頃	ベツレヘムで生まれ30歳の頃洗礼を受け、ガリラヤ地方で伝道を始め、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」と説いた。人間の死は原罪により避けられない…。死後、魂は最後の審判まで墓で眠る・死後魂は神のもとへ帰る。
イスラム教	ムハンマド (マホメット)	後570年 ～632年	メッカに生まれ、6歳で孤児になり、12歳頃より隊商に加わり、各地を訪れユダヤ教やキリスト教を知る。40歳の頃、アッラーの預言者を自覚。死とは、死の天使が死体から魂を抜き取る事。魂は最後の審判まで墓で眠る。来世に重点。
古ジ代ブ エト	転生思想 (オシリス教)	前3000年頃 ～前30年 (ローマに征服)	人間は肉体と魂でできていて、死と共に太陽神ラーのもとに行き、再び肉体に戻るためにミイラを作って保存した。その後ミイラへの習慣は薄れた。オシリス教(前2400～2200年頃)では、死後魂は裁かれ、無罪なら魂はオシリスの楽土に転生し、有罪なら怪物に食われ復活できなかった。→キリスト教の復活や永生の思想の原点になったと考えられる。
古リ代シ ギャ	輪廻思想 (オルフェ ウス教)	前2000年頃 ～前146年 (ローマに併合)	生命はプシュケー(空気)でできていると考えられ、死ぬとプシュケーも空気になり大自然に戻った。その後プシュケーは靈魂とか魂の意味を持つようになり、前6世紀頃のオルフェウス教では、死ぬとプシュケーは解放され、死後魂は裁かれ、正しい生活をした魂は天に昇って永遠の生命を得た。その反対は、数回輪廻を繰り返した後永遠の生命を得た。
古イ代リ ン ヤ 哲 学	ソクラテス	前470年頃 ～前399年	オルフェウス教やピタゴラス学派の影響を受け、魂の不死を信じていた。無知の知によって人々が自分自身を反省し、自分の魂に気を遣うよう説得した。無知の知を自覚させることが神から与えられた自分の使命として、敢えて刑死した。
	プラトン	前427年 ～前347年	「国家」の最後の第5部で、正しい人間はこの世でもあの世でも、幸福で大きな報いがあることを主張するために魂の不死を証明した。プラトンの哲学は、超感覚的なイデアの世界による現実の世界の支配という形を取っている。
	アリスト テレス	前384年 ～前322年	プラトンの観念論に対し、生物学中心の経験主義的な傾向が見られる。アリストテレスの哲学は、存在するものを存在するものとして、あるいは存在する限りにおいて研究する学とした。人はできるだけ不死を願い…。→魂の不死の信仰。
中ス世 コ ラ 哲 学	トマスア クイナス (イタリア)	1225/6年 ～1274年	中世最大のスコラ哲学者で、アリストテレスの哲学とキリスト教を抱き合わせキリスト教を権威づけようとした。全ての存在者は存在と本質は区別されるが、ただ神のみにおいて存在と本質は全く同じである。→死後、論争が起こった。
	ドゥ ンス・ スコ トウス (スコ ット ランド)	1266/74年 ～1308年	トマスアクイナスとは異なる存在論の立場に立っていて、トマスアクイナスの「存在と本質」の区別に異議を唱えた。ハイデガーはドゥンス・スコトウスの研究を通じ、アリストテレスの存在論の罅に気付く「存在と時間」を執筆。
近 世 ↓ 近 代 哲 学	デカル ト (フランス)	1596年 ～1650年	何事も疑う事が大事だとして「我思う、ゆえに我あり」の根本原理を打ち立てた。また物質と精神、心と身体…のような「二元論」を唱えた。「省察」で神の存在と人間の靈魂と肉体の区別が論証されており、靈魂の不滅が考えられる。
	パスカ ル (フランス)	1623年 ～1662年	「パンセ」…「人は自然の中で最も弱い一本の葦に過ぎない。しかしそれは考える葦である」が有名。又、「神ありとかけ…永遠の生命と無限の幸福が得られる。神なしとかけ…地上の有限な幸福しか得られない」→永遠の生命の信仰。
	カント (ゲ ーテ (ドイツ)	1724～1804年 (1749～1832年)	カント:人格に最高の価値を置いた人格主義の立場…自己は他者に、何時も目的として扱い、手段としては扱わない。ゲーテ:死後の世界を信じない人は、この世から死んだのと同じ。…2人共、神と「靈魂の不滅」を信じていた。
	ヘーゲ ル (ドイツ)	1770年 ～1831年	限定的な物の存在とは、過ぎて行くという事実を自分自身の中に持つという事で、限りある物(人間等)の誕生の時は、その死の時である。ハイデガーの「死への存在」に近い捉え方をしている。ヘーゲルの弁証法と歴史哲学が有名。
	ショー ベン ハウ アー (ドイツ)	1788年 ～1860年	宇宙や万物の根本にあるものは「生きようとする意志」で、これが様々な形で現れたものが世界である。この意志がいつも満たされない欲望を追っているのだから、人生は永遠の苦しみの連続である。生に最大重点があり、死は問題外。
近 代 ↓ 現 代 哲 学	キルケ ゴール (デン マーク)	1813年 ～1855年	「死にいたる病」…人間が苦悩と絶望から脱出するためには、自分の内にある永遠なものを与える神を知り、神と対面することが必要。死と絶望を感じつつ、苦悩からの開放と永遠性の獲得こそが真の幸福である。永遠性を信じていた。
	ニー チェ (ドイツ)	1844年 ～1900年	「神は死んだ」で有名。伝統的な価値を打消し、神がないニヒリズムの世界での人間の生き方を示した(生の哲学…死は問題外)。ショーベンハウアーの影響でインド哲学や輪廻思想にも関心。神の死→頼れるものの喪失→ニヒリズム→幸・不幸の人生を受け入れる(運命愛)→もう一度人生を(永遠回帰)→全自己の肯定(超人)→生の徹底的肯定!
	ヤス パー ス (ドイツ)	1833年 ～1969年	キルケゴールの影響。実存は自分と超越者に関わる事で、全てのものは超越者を目指して、人は極限状態(近親者や自分の死)に置かれて初めて神の存在に触れられる。実存とは、自分の過去を背負い未来を含む今という現在の充実。
	ハイ デ ガ ー (ドイツ)	1889年 ～1976年	人間の存在は誕生と死との間にあり人は常に死の可能性がある。人の誕生の第一日は死への第一日である。人間が自分の死を自覚した時、その時間は従来の時間と異なり、より根源的な本来的な時間となる。限られた時間を死への存在として生き抜けば、この一瞬一瞬が大切と自覚できる。人間の存在は、過去と引き寄せた未来の合流点にある現在である。
	サル トル (フランス)	1905年 ～1980年	死は偶然的な事実で、死者となったという事は生きている人達の所有物になること。人は死んだ瞬間から、その人の歩んだ全人生は、残された人達の思考の世界に納められる。死は、私にとって全ての可能性がなくなり、死の瞬間には私と死との間が最小になり未来も何も無くなる。人間にとって、生きる事も死ぬ事も不条理(筋道がたたないこと)だ。

参考資料: 死生学研究会資料 ■ ④空(くう)について ⑧死とは何か? ⑩自力と他力

参考文献: 日本の宗教(田中治郎著・日本文芸社)、死に直面したあなたに(内田 誠著・死生学研究会)、日本と世界の宗教がひと目でわかる!(歴史の謎研究会編・青春出版社)、犀の角たち(佐々木閑著・大蔵出版)、魂は千の風になりますか?(ひろさちや著・幻冬舎)

©2016 死生学研究会

死生学研究会
Thanatology Research Center
TEL 042-624-1355